

児童と成人におけるポジティブ・イリュージョン

筑波大学大学院(博)心理学研究科 外山 美樹

筑波大学心理学系 桜井 茂男

Positive illusions for children and adults

Miki Toyama and Shigeo Sakurai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study was to investigate the developmental process of positive illusions in children and adults. A questionnaire concerning positive illusions was completed by 274 children (grade 4=87, grade 5=91, and grade 6=94) in Study 1, and 73 adults in Study 2. The results revealed that there are differences in the existence of positive illusions and in how positive illusions are manifested according to developmental level. Fourth graders exhibit neither positive nor negative illusions and tend to regard themselves as being equal to the average child. In general, 5th graders and 6th graders exhibit negative illusions. In contrast, adults exhibit positive illusions in almost all aspects. These findings suggest that rather than having cognitive factors, motivational factors, such a self-presentational strategy, are important for positive illusions.

Key words: positive illusions, negative illusions, children, adults, self-presentational strategy.

近年、自己認知のあり方を扱う研究が再び活気を呈している。そうした研究の中で特に注目されるのが、「自分の都合の良いように傾いた認識こそ、人が精神的適応的に生きていく上で必要である」とするポジティブ・イリュージョン(positive illusion)の考え方である。

ポジティブ・イリュージョンとは、自己高揚的動機に基づく認知バイアスのことであり、「実際に存在するもの・ことを、自分に都合良く解釈したり想像したりする精神的イメージや概念である」と定義される(Taylor & Brown, 1988)。

さらに、Taylor & Brown(1988)は、ポジティブ・イリュージョンを、(1)自分自身をポジティブにとらえる(self-aggrandizement)、(2)自分の将来を楽観的に考える(個人的楽観主義)(unrealistic optimism)、(3)外界に対する自己の統制力を高く判断する(exaggerated perception of control)の3つの領域から捉え、この3つのポジティブ・イリュージョ

ンが精神的健康に結びついていると結論している。つまり、精神的に健康な人は、自己を良き者と考え、自分の未来を明るく描き、自己の統制力を強く信じる傾向が見られるというのである。

欧米においては、ポジティブ・イリュージョンが自己認知の様々な領域、側面に存在することが確認されている(たとえば、Brown, 1986; Dunning, Meyerowitz, & Holzberg, 1989; Markus & Nurius, 1986)。ところが、わが国の研究を概観すると、総じて日本人は、欧米人とは対照的ないわば自己批判的、あるいは自己卑下のバイアスが顕著であることが示唆されている(たとえば、遠藤, 1995; Heine & Lehman, 1995; Kasima & Triandis, 1986)。

しかし、外山(1999)は、これまでの日本人における自己批判、自己卑下の傾向の存在は、主に能力の分野に限っての自己認知の側面について報告されたものであることを指摘し、集団志向的で周囲の人々との調和や一致を重んじるといわれる日本人にとつ

て重要であると考えられる自己認知の側面においては、日本人においても、自己高揚的なバイアス、すなわちポジティブ・イリュージョンが見られることを実証した。

外山(1999)によると、青年(大学生、専門学校生)の自己認知のあり方においては、身体的特徴(外見)や知的能力、あるいは外交性(社交性)の側面においては確かに自己卑下のバイアス(ポジティブ・イリュージョンに対応してこれをネガティブ・イリュージョンと呼ぶことにする)が顕著であるが、調和性や誠実性の側面においては、日本人においてもポジティブ・イリュージョンが見られることを見いだした。

そして、これらの結果に対して「独立の-相互依存的自己理解(independent-interdependent construal of self)」という概念を用いて、考察を加えている。つまり、相互依存的自己観を有する日本人には、個人を他者から際立たせる特性の社交性や知性あるいは身体的特徴よりは、調和性や誠実性の側面においてポジティブ・イリュージョンが見られたのではないかと考えているのである。

以上の知見は、日本人においてもポジティブ・イリュージョンが存在することを示唆するものである。しかしこれらは、今のところ青年に限られた現象であり、ポジティブ・イリュージョンの発達や形成についてはいまだ検討されていない。

そこで、本研究ではポジティブ・イリュージョンの発達や形成を探る第一段階の試みとして、青年期以外の発達段階の被調査者、ここでは児童(研究1)と成人(研究2)を対象にして、ポジティブ・イリュージョン現象の発達の検討を探索的に行うことを目的とする。

研究 1

Taylor & Brown(1988)が提唱したポジティブ・イリュージョンの3つの領域のうちの1つである「自分自身をポジティブに捉える(以下、自己と略す)¹⁾」に焦点を当てて、児童においてもポジティブ・イリュージョン(あるいはネガティブ・イリュージョン)が見られるのかどうか、またもし見られるのなら、自己認知のどの側面に見られるのかを探索的に検討することを目的とする。

1) 本研究で「自己」の領域に焦点を当てたのは、外山(1999)の結果より、「自己」の領域においてはネガティブ・イリュージョンとポジティブ・イリュージョンの存在が明確に示されたからである。

方法

被調査児 茨城県内の小学校4年生89名(男子55名、女子34名)、5年生91名(男子47名、女子44名)、6年生94名(男子51名、女子43名)の計274名(男子153名、女子121名)。

質問紙 ポジティブ・イリュージョンに関する質問紙:外山(1999)によるポジティブ・イリュージョンを測定する質問紙(「自己」の領域)を小学生に合うように改良したものをを用いた。これは「社交性」、「経験への開放性」、「調和性」、「誠実性」、「身体的特徴」の5つの下位分類、各々5項目の計25項目で構成されている。外山(1999)に準拠し、「同じクラスのお友達と比べてあなたは〇〇と思いますか」と問う相対的方法を用いた。3段階評定(「-1点」…いいえ、「0点」…どちらともいえない(お友達と同じくらいである)、「1点」…はい)である(ex.「同じクラスのお友達と比べて、あなたはやさしいと思いますか」)。

手続き 上記の質問紙が1999年6月に実施された。調査はクラス単位で行われ、担任教師が質問項目を読みあげて被調査児に回答させる強制速度法が採用された。

結果と考察

各質問項目の得点(以下「DC」得点と記す)の平均値と標準偏差がTable 1に示されている。「DC」得点は、自己を他者(クラスのお友達)と同程度にみなしている場合には「0」点、自己を他者よりも優位にみなしている場合にはプラスの得点、逆に自己を他者よりも卑下している場合にはマイナスの得点となる。

次に、ポジティブ・イリュージョンが起こっているのかどうかを検討するために、学年別に、尺度の中央値(=0)との違いを t 検定により検討した。この検定方法では、大多数の人が平均的な人に比べて自分の方が上であるとみなすのは、統計上不合理であるとし、これを「イリュージョン」と捉える。すなわち、「DC」得点が、有意に正であれば「ポジティブ・イリュージョン」が、逆に有意に負であれば「ネガティブ・イリュージョン」が集団として見られることを意味する。 t 検定の結果もTable 1に示されている。

3学年にわたってポジティブ・イリュージョンが見られたのは、「社交性」の「友達がたくさんいる」、「明るい」ならびに「誠実性」の「やくそくを守る」の3項目のみであった。4年生においてのみポジティブ・イリュージョンが見られたのは、「経験への開放性」の「勉強ができる」、「特技が多い」およ

Table 1 子どもにおける「自己」の評定平均(標準偏差)およびt検定の結果

	4年生(n=89)		5年生(n=91)		6年生(n=94)	
	DC	t値	DC	t値	DC	t値
社交性						
友だちがたくさんいる	.67 (.54)	11.80** ^(P)	.40 (.68)	5.54** ^(P)	.37 (.66)	5.51** ^(P)
好かれている	-.36 (.66)	5.13** ^(N)	-.38 (.65)	5.68** ^(N)	-.39 (.59)	6.46** ^(N)
にんきものである	-.43 (.64)	6.32** ^(N)	-.43 (.67)	6.11** ^(N)	-.56 (.60)	9.16** ^(N)
明るい	.52 (.64)	7.60** ^(P)	.22 (.83)	2.53** ^(P)	.35 (.74)	4.58** ^(P)
積極的である	-.03 (.70)	.46	-.24 (.74)	3.14** ^(N)	-.34 (.68)	4.85** ^(N)
経験への開放性						
勉強ができる	.13 (.55)	2.32* ^(P)	-.19 (.65)	2.75** ^(N)	-.23 (.62)	3.58** ^(N)
頭がよい	-.03 (.61)	.52	-.33 (.70)	4.49** ^(N)	-.37 (.67)	5.36** ^(N)
才能がある	.04 (.80)	.53	-.20 (.79)	2.38* ^(N)	-.24 (.76)	3.13** ^(N)
いろいろなことを知っている	-.17 (.71)	2.24* ^(N)	-.32 (.73)	4.17** ^(N)	-.31 (.72)	4.16** ^(N)
特技が多い	.18 (.79)	2.14* ^(P)	-.03 (.82)	.38	-.15 (.75)	1.94* ^(N)
調和性						
やさしい	.09 (.53)	1.58	-.24 (.58)	3.95** ^(N)	-.26 (.57)	4.37** ^(N)
親切である	.15 (.63)	2.18* ^(P)	-.24 (.64)	3.61** ^(N)	-.22 (.59)	3.67** ^(N)
すなおである	.04 (.60)	.71	-.32 (.67)	4.57** ^(N)	-.26 (.60)	4.10** ^(N)
おもいやりがある	.00 (.74)	.00	-.20 (.72)	2.63** ^(N)	-.33 (.59)	5.39** ^(N)
心がひろい	.13 (.71)	1.79	-.16 (.75)	2.10* ^(N)	-.20 (.65)	3.02** ^(N)
誠実性						
まじめである	.03 (.68)	.47	-.31 (.63)	4.68** ^(N)	-.36 (.62)	5.66** ^(N)
きちょうめんである	-.09 (.67)	1.27	-.22 (.67)	3.16** ^(N)	-.32 (.69)	4.48** ^(N)
責任感がある	.06 (.68)	.78	-.14 (.69)	1.97	-.26 (.70)	3.52** ^(N)
やくそくを守る	.26 (.59)	4.10** ^(P)	.30 (.64)	4.41** ^(P)	.21 (.65)	3.12** ^(P)
うそをつかない	-.12 (.64)	1.83	-.41 (.63)	6.14** ^(N)	-.38 (.62)	5.95** ^(N)
身体的特徴						
顔がかっこいい(かわいい)	-.52 (.59)	8.32** ^(N)	-.56 (.64)	8.40** ^(N)	-.62 (.59)	10.16** ^(N)
ルックスがいい	-.18 (.67)	2.54** ^(N)	-.49 (.64)	7.38** ^(N)	-.43 (.66)	6.22** ^(N)
かみがたがかっこいい(かわいい)	-.20 (.76)	2.52* ^(N)	-.33 (.68)	4.60** ^(N)	-.46 (.62)	7.20** ^(N)
洋服やくつがかっこいい(かわいい)	-.20 (.66)	2.89* ^(N)	-.30 (.68)	4.19** ^(N)	-.36 (.67)	5.24** ^(N)
おしゃれである	-.30 (.80)	3.56** ^(N)	-.53 (.66)	7.68** ^(N)	-.56 (.70)	7.85** ^(N)

注1) ^(N)はネガティブ・イリュージョンが,^(P)はポジティブ・イリュージョンが見られたことを意味する。

注2) * $p < .05$, ** $p < .01$.

び「調和性」の“親切である”であった。5, 6年生においては、既に述べた3項目以外にポジティブ・イリュージョンが見られた項目はなかった。

また、4年生は全体的に見て、ポジティブ・イリュージョンもネガティブ・イリュージョンも見られない項目が多かった。すなわち、自分をクラスのお友達と同じくらいに捉えている傾向のあることが明らかにされた。外山(印刷中)は、小学4年生あたりから自己評価のための社会的比較(social comparison)が可能になることを指摘しているが、本研

究の結果は、このような知見と符号するものとして解釈できるかもしれない。つまり、自分と他者とを比較する社会的比較が可能になるにつれて、客観的な自己評価ができるようになってくるのである。

一方、5, 6年生の結果を見ると、ポジティブ・イリュージョンが見られた3項目以外はほぼすべてにおいてネガティブ・イリュージョンの存在が確認された。堂野ら(堂野・田頭・土江, 1990; 堂野・山中, 1989)は児童期から青年期にかけての劣等感の発達の変化を検討し、5年生という時期が1つの

大きな変動期・転換期であり、心身ともに動揺しやすく不安定になりやすい発達段階であることを指摘している。さらに、小学校高学年は、能力を努力とは異なる安定した概念であるにとらえることができるようになるなど、社会的認知の著しい発達が見られる時期でもあることが報告されている (Rholes, Newman, Newman, & Ruble, 1990)。しかし、自己の中にあるネガティブな特性とポジティブな特性とを柔軟に統合して考えられるようになるまでには至っていないため、自己のネガティブな特性により敏感になるのではないかと考えられる。本研究においても、5年生でネガティブ・イリュージョンが見られる項目が一挙に増えており、堂野・山中(1989)の見解と軌を一にするものであった。

研究 2

成人を対象にして、研究1と同様の方法で、「自己」の領域におけるポジティブ・イリュージョン(ならびにネガティブ・イリュージョン)の現象を探ることを目的とする。

方法

被調査者 28歳から63歳の成人73名(男性26名, 女性47名)。平均年齢(SD)は41.71歳(13.48)であった。

質問紙 ポジティブ・イリュージョンに関する質問紙: 外山(1999)のポジティブ・イリュージョンを測定する質問紙(「自己」の領域)を用いた。「社交性」、「経験への開放性」、「調和性」、「誠実性」、「身体的特徴」の5つの下位分類、各々5項目の計25項目で構成されており、7段階評定である。研究1と同様に「同じ年代の人と比べてあなたは〇〇と思いますか」と問う相対的方法が用いられた。

手続き 宮崎県内の普通科高等学校卒業生名簿からランダムに抽出し、両親のどちらかに回答させた。1998年10月に質問紙を郵送し、回答を求めた。回収率は73%であった。

結果と考察

「DC」得点の平均値と標準偏差が Table 2 に示されている。研究1と同様に、ポジティブ・イリュージョンが起こっているのかどうかを検討するために、*t*検定を行った(Table 2 参照)。Table 2 には大学生における結果(外山(1999)から抜粋)も併せて示されている。

成人においてポジティブ・イリュージョンが見られたのは、「経験への開放性」、「調和性」ならびに

「誠実性」の側面のすべての項目であった。「調和性」と「誠実性」においては、大学生における結果とほぼ同様である。しかし、「経験への開放性」においては、大学生ではネガティブ・イリュージョンの存在が確認されていたものも、成人ではすべてポジティブ・イリュージョンが見られる結果となった。「社交性」においても、大学生では同じくネガティブ・イリュージョンが見られていたものが、成人においては、「明るい」、「積極的である」においてはポジティブ・イリュージョンが見られた。「身体的特徴」においては大学生と同様の結果であり、「健康的に見える」を除くすべての項目においてネガティブ・イリュージョンの存在が確認された。

以上の結果をまとめると、「調和性」、「誠実性」ならびに「身体的特徴」においては大学生の結果とほぼ同じであった。しかし、「社交性」と「経験への開放性」においては、両者に違いが見られ、全体的に見て成人ではポジティブ・イリュージョンの見られる項目が多かったといえる。

まとめと今後の課題

研究1と研究2、ならびに外山(1999)の研究結果を併せて考えると、ポジティブ・イリュージョン(ならびにネガティブ・イリュージョン)が見られる側面は、調査対象(発達段階)によってかなり異なるようである。

青年(外山(1999)による)においては、「調和性」および「誠実性」の側面においてポジティブ・イリュージョンの存在が確認された。しかしそのような現象は、児童においては全く支持されなかった。小学4年生においては、ポジティブ・イリュージョンもネガティブ・イリュージョンも見られない項目が多く、自己を友達と同じくらいに認知している傾向が伺えた。しかし、5年生を軸に、ほぼすべての側面においてネガティブ・イリュージョンが見られることが明らかにされた。

成人においては、大学生と同様に「調和性」と「誠実性」の側面においてポジティブ・イリュージョンが見られたが、「経験への開放性」の側面においてもポジティブ・イリュージョンの存在が確認された。また、「社交性」の側面においてもポジティブ・イリュージョンが見られた項目があった。

「身体的特徴」においてはすべての対象(児童, 青年, 成人)にわたってネガティブ・イリュージョンが見られ、小さい時から、自分の外見, 容姿を相対的に卑下して認知していることが明らかにされた。

Table 2 大学生と成人における「自己」の評定平均(標準偏差)およびt検定の結果

	大学生 (n=359)		成人 (n=73)	
	DC	t 値	DC	t 値
社交性				
社会的である	-.14 (1.49)	1.78 ^{+(N)}	-.19 (1.59)	.99
同性の間で人気がある	-.29 (1.17)	4.70 ^{** (N)}	.01 (.94)	.09
異性の間で人気がある	-.95 (1.28)	14.08 ^{** (N)}	-.34 (1.25)	2.24 ^{* (N)}
明るい	.57 (1.37)	7.89 ^{** (P)}	.55 (1.44)	3.24 ^{** (P)}
積極的である	-.22 (1.40)	2.98 ^{** (N)}	.50 (1.49)	2.85 ^{** (P)}
経験への開放性				
頭の回転が速い	-.33 (1.40)	4.47 ^{** (N)}	.44 (1.59)	2.27 ^{* (P)}
何か才能がある	-.01 (1.44)	.13	.48 (1.48)	2.63 ^{* (P)}
個性的である	.23 (1.52)	2.87 ^{** (P)}	.30 (1.01)	2.52 ^{* (P)}
興味が広い(趣味, 特技など)	.11 (1.54)	1.36	.38 (1.51)	2.05 ^{* (P)}
知的である	-.29 (1.30)	4.23 ^{** (N)}	.30 (1.29)	1.99 ^{* (P)}
調和性				
思いやりがある	.63 (1.19)	10.04 ^{** (P)}	.75 (1.31)	4.76 ^{** (P)}
親切である	.54 (1.26)	8.13 ^{** (P)}	.48 (1.25)	3.25 ^{** (P)}
寛大である	.27 (1.42)	3.61 ^{** (P)}	.30 (1.21)	2.07 ^{* (P)}
おおらかである	.48 (1.38)	6.60 ^{** (P)}	.92 (1.50)	5.14 ^{** (P)}
素直である	.45 (1.53)	5.58 ^{** (P)}	.64 (1.42)	3.78 ^{** (P)}
誠実性				
まじめである	.56 (1.51)	7.04 ^{** (P)}	.89 (1.47)	5.15 ^{** (P)}
きちょうめんである	.23 (1.61)	2.71 ^{** (P)}	.44 (1.56)	2.40 ^{* (P)}
責任感がある	.56 (1.46)	7.28 ^{** (P)}	1.03 (1.18)	7.38 ^{** (P)}
誠実である	.61 (1.28)	9.04 ^{** (P)}	.95 (1.33)	6.06 ^{** (P)}
自分に厳しい	-.34 (1.52)	4.24 ^{** (N)}	.51 (1.42)	3.02 ^{** (P)}
身体的特徴				
容姿がよい	-.70 (1.26)	10.54 ^{** (N)}	-.45 (1.16)	3.24 ^{** (N)}
魅力的である	-.46 (1.32)	6.61 ^{** (N)}	-.55 (1.38)	3.33 ^{** (N)}
スタイルがよい	-1.16 (1.41)	15.61 ^{** (N)}	-.88 (1.45)	5.06 ^{** (N)}
健康的に見える	.66 (1.68)	7.45 ^{** (P)}	.78 (1.49)	4.36 ^{** (P)}
ファッションセンスがよい	-.56 (1.27)	8.37 ^{** (N)}	-.33 (1.20)	2.29 ^{* (N)}

注1) 大学生のデータは、外山(1999)による。

注2) ^(N)はネガティブ・イリュージョンが、^(P)はポジティブ・イリュージョンが見られたことを意味する。

注3) ⁺p<.10, ^{*}p<.05, ^{**}p<.01.

ところで、Taylor & Brown(1988)は、ポジティブ・イリュージョンを生得的に備えもつ自己概念の認知的な歪みであると考えているが、少なくとも本研究の結果からはそのような見解は支持され得ないことが示唆された。また、ポジティブ・イリュージョンは幼年期に顕著であり、成長するにつれて衰える、という主張(Taylor, 1989)も支持されなかった。本研究の結果からは、ポジティブ・イリュージョン現象は認知的な影響というよりもむしろ、無

意識的あるいは自動的な自己呈示方略の1つ、すなわち動機的な要因をもった現象と捉えるのが妥当ではないかと思われる。

近年、自己呈示の研究においては、自己呈示の対象を「他者」に限定せず、「自分自身」をも含めるとした見解が多く見られるが(たとえば、Baldwin & Holmes, 1987; Greenwald & Breckler, 1985)、ポジティブ・イリュージョンは自分自身(これをBaldwin & Holmes(1987)は「内なる聴衆」と呼んでいる)を

対象とした自己呈示なのではないかと考えられる。現段階では、このことを特定することは困難であり試論的解釈に過ぎないが、今後は実験的手法も導入し、これらの諸問題を解明すべくポジティブ・イリュージョンのメカニズムを探っていきたいと考えている。

また、本研究の一般化には慎重を要する。特に成人(研究2)においては、サンプル数が少ないばかりか年齢の範囲も多岐にわたっているため、今後はサンプル数を増やし、年代別の検討なども必要になってくるであろう。子どもにおいても、被調査者の枠(幼児や中学生)を広げた横断的研究が必要とされる。また、今回とりあげた児童においてもさらにサンプル数を増やし、ポジティブ・イリュージョンの性差の検討なども望まれる。

本研究で得られた知見を一つの布置としてとらえ、ポジティブ・イリュージョンの発達や形成についてさらなる検討を行っていきたいと考えている。

引用文献

- Baldwin, M.W. & Holmes, J.G. 1987 Salient private audiences and awareness of the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 1087-1098.
- Brown, J.D. 1986 Evaluations of self and others: Self-enhancement biases in social judgements. *Social Cognition*, **4**, 353-376.
- 堂野佐俊・田頭穂積・土江禎子 1990 児童期の心理的ストレスに関する一研究 広島文教女子大学紀要, **25**, 165-176.
- 堂野佐俊・山中幸子 1989 児童の劣等感と学習意欲の相関的研究(その2)―劣等感と学習意欲との関係― 広島文教教育, **4**, 33-44.
- Dunning, D., Meyerowitz, J.A. & Holzberg, A.D. 1989 Ambiguity and self-evaluation: The role of idiosyncratic trait definitions in self-serving assessments of ability. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 1082-1090.
- 遠藤由美 1995 精神的健康の指標としての自己をめぐる議論 社会心理学研究, **11**, 134-144.
- Greenwald, A.G., Breckler, S.J. 1985 To whom is the self presented? In B.R.Schlenker (Ed.), *The self and social life*. New York: McGraw-Hill.
- Heine, S. & Lehman, D. 1995 Cultural variation in unrealistic optimism: Does the West feel more invulnerable than the East? *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 595-607.
- Kashima, Y. & Triandis, H.C. 1986 The self-serving bias in attributions as a coping strategy: A cross-cultural study. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **17**, 83-97.
- Markus, H., & Nurius, P. 1986 Possible self. *American Psychologist*, **41**, 954-969.
- Rholes, S., Newman, L. & Ruble, D.N. 1990 Understanding self and other: Developmental and motivational aspects of perceiving persons in terms of invariant dispositions. In E.T. Higgins & R.M. Sorrentino (Eds.), *Handbook of motivation and cognition: Foundations of social behavior*, Vol. **2**, New York: Guilford Press. 369-407.
- Taylor, S. 1989 *Positive illusions: Creative self-deceptions and healthy mind*. New York: Basic Book.
- Taylor, S.E. & Brown, J.D. 1988 Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, **103**, 211-222.
- 外山美樹 1999 日本人におけるポジティブ・イリュージョンと精神的健康 筑波大学心理学研究科修士論文(未公刊)
- 外山美樹 印刷中 児童における社会的比較の様態 筑波大学発達臨床心理学研究